

# 保幼小の接続期における「音遊び」の可能性

—幼児教育と小学校教育の視点から—

白石 朝子

## The Possibility of Playing With Sound For Cooperation Between Nursery and Primary School : Considering the Early Childhood and Primary Education

Asako SHIRAISHI

### 1. はじめに

幼児期の子どもは、生涯にわたって生きる力の基礎を身につけるために、どのような力を養うことが望まれるのか。『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』には、その後の育ちへ向けた3つの資質・能力、「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」を養うことが示されている。この提示には、保育者が幼児期から学童期、青年期へと発達していく子どもを、幼児としての姿だけではなく、長期的な視野で捉えることの重要性が含まれている。

領域「表現」においても、保育者の導きや共感によって、子ども自身が主体的な表現を生み出していくことは、小学校教育における様々な場面での積極的な意欲や関心、態度へとつながる。平成30年度の学習指導要領等改訂では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」<sup>1)</sup>(以下、「10の姿」と表記)が明示されることで、子どもの姿を小学校と共有し、幼小連携を踏まえた指導法を考える必要性がより明確になった。また、保育者は児童期における教育内容の深さや広がりをも十分に理解した上で、子どもの育ちを考えることが大切であり、そのためには、学習指導要領の内容についても関心を持ち、小学校以降の教育についても知識を得ていることは重要であるだろう。

これまででも、幼児教育と小学校教育の接続の観点から音楽表現の指導法に関する研究が行なわれてきた。例えば、岡林ら(2017)は、絵本を用いた「表現遊び」から「音楽づくり」へと移行する音楽活動を提案している<sup>2)</sup>。しかし、実践的な指導方法については、未だ十分な提案が行われているとはいえず、様々な取り組みの可能性があると見えるだろう。

以上のことを踏まえ、本研究では、円滑な保幼小接続を意識した音楽表現の指導法について、モノや楽器を使用した音を表現する方法「音遊び」の可能性を探ることを目的とした。その方法として、学習指導要領等の改正を踏まえた保幼小連携を捉えたうえで、研究者が音の表現を主眼とした「音遊び」の授業を実践した。その際に、学生へのアンケートを行い、その分析をもとに学生の意識変化を捉えるとともに、「音遊び」が、小学校における児童の「音楽」の授業へどのように生かされていくのかについて検討したい。

## 2. 幼稚園教育要領と小学校学習指導要領における「音」の捉え方と位置づけ

### (1) 次期学習指導要領等の内容と保幼小の接続

学習指導要領改訂の大きな特徴として、第2章第6節「音楽」の目標では、「音楽に対する感性を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成を目指すこと」を、3つの柱である「①知識と技能」「②思考力・判断力・表現力等」「③学びに向かう力・人間性等」によって明確化したことが挙げられよう。3つの柱は、それぞれが①曲想と音楽の構造などとの関わりについての理解や音楽表現に必要な技能、②音楽表現の工夫や音楽を味わって聴くこと、③音楽活動の楽しさの体験により音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育み、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培うと明示されている。

各学年の目標でも同様に3つの柱が明確化されており、例えば幼児期から直接つながる第1学年及び第2学年では、「①曲想と音楽の構造などとの関わりへの気付きや音楽表現を楽しむために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付けること」「②音楽表現を考えて表現に対する思いをもつことや、曲や演奏の楽しさを見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。」「③楽しく音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、身の回りの様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。」と記された。

一方で、幼稚園教育要領改訂では、学校教育の始まりとして、小学校の学習指導要領との整合性と連続性が図られ、幼稚園教育において育みたい資質・能力が3つの柱として明確化されたり、「10の姿」が明記されたりしたことは、前述の通りである。さらに、「10の姿」については、学習指導要領の「音楽科」でも、「低学年において…他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めようとするとともに、幼児の終わりまでに育てほしい姿との関連を考慮すること」と加筆され、その関連性が明記されている。

### (2) 「音」の捉え方と位置づけ

幼稚園教育要領の改訂に伴う領域「表現」に関しては<sup>3)</sup>、内容取り扱いの「豊かな感性は、身近な環境と十分関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること」に、一文が加筆されたことが大きな特徴のひとつである。その一文とは、「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」である。

この一文には、幼児の豊かな感性や自分なりの表現を培う上で、身近な自然や生活の中にある、ふとすると目や耳に留めたりしないような音や形、色に気付き、それらを楽しむことが大切であることを示し、保育現場でそれらに触れる機会を求めることへの期待が表れている。特に、「音」に関しては、「風の音」や「雨の音」の例があるように、自然に耳を傾け、それをイメージして表現する遊びにつなげていくことが、音表現の楽しさを生み出す可能性をもっているといえる。音の表現の仕方は、オノマトペを用いたり、モノや楽器をつかって音をつくったりと様々な手段があるが、表現をすることで音を再認識し、他者と共有したり、違いを感じたりすることが、幼児のより豊かな感性を育むであろう。

一方で、学習指導要領「音楽」第1学年及び第2学年の「表現」は、現行通り、歌唱・器楽・

音楽づくりに分かれているが、それぞれについて、改訂により具体的な内容が明記された。中でも、「音楽づくり」では、「音遊びを通して、音楽づくりの発想を得ること」や「どのように音を音楽にしていくかについて思いをもつこと」ができる指導が求められ、「声や身の回りの様々な音の特徴」や「音やフレーズのつなげ方の特徴」に気付き面白さを感じて、それらの発想を生かした表現や、思いにあった表現が求められている。

このことから、幼児期の「音」への耳の傾け、さらに前述したような「音遊び」が、保育者や友だちとともに経験されていれば、子どもの「音」への気づきは、より豊かなものになり、それらが児童の「音楽づくり」へ生かされることになるだろう。その具体的な方法について、研究者による授業実践を踏まえて考えたい。

### 3. 音表現の授業実践と学生の意識変化

#### (1) 授業の目的と学生への授業前アンケート

本学の保育内容演習（表現A）の授業では、保育学科の2年生を対象に、子どもの音楽表現とその指導法について、2つのグループに分けて指導を行っている。2つのグループの学生は、「身体を用いた音楽表現」と「楽器を用いた音楽表現」をテーマとした授業を受ける。研究者は、後者の「楽器やモノをつかった音楽表現」の指導を担当しており、その中で、プロの打楽器奏者である林美春氏<sup>4)</sup>を迎えて、様々な楽器のあらゆる技法によって音の出し方を工夫し「音の表現」の可能性を探る特別講義を企画した。

まず、学生の状況を把握するために、授業前に意識アンケート調査を行った。表1がその結果である。82人の対象学生のうち、打楽器の音表現については「楽しい」イメージをもつ学生が76人（92.7%）と多く、全体のほとんどを占めている。しかし、その実践については、「演奏しにくい」と感じる学生が26人（31.7%）と全体の3分の1を占めており、さらには、「指導しにくい」と考える学生は、46人（56.1%）と半数以上を占めていることが明らかになった。鼓笛隊や吹奏楽部などで経験のある学生がいるものの、打楽器に対して少なからず苦手意識をもつ学生が多いことがわかった。

学生が「演奏しにくい」として挙げた理由は、表2の通りである。アンケートは自由記述としたが、その理由は、大きく7つに分けられた。第一に、音表現に対して、リズム楽器としてリズムをとったり演奏したりするという合奏のようなイメージが先行し、「リズムが取れない」

表1 授業前アンケート

	選択肢	数値
1	楽しい	76(92.7)
	つまらない	6(7.3)
2	演奏しやすい	56(68.3)
	演奏しにくい	26(31.7)
3	身近なもの	43(52.4)
	特別なもの	39(47.6)
4	指導しやすい	36(43.9)
	指導しにくい	46(56.1)

単位:人(%)

表2 「演奏しにくい」を選んだ理由

	理由	人数
1	難しいから	6
2	リズムが取れないから	6
3	技術が必要だから	4
4	経験がないから	4
5	苦手だから	1
6	合わせるのが大変だから	1
7	ごまかせないから	1
8	記述なし	2

という回答が多かったこと、第二に、「難しい」や「技術が必要」といった、苦手意識をもつ学生がいることが分かった。また、「指導しにくい」理由としても同様に、「リズムの指導が難しい」という答えが多くみられ、学生には、打楽器＝リズム楽器というイメージが定着していることが明らかになった。そのため、研究者は、学生に音表現のイメージを伝えることが大切であると考え、授業を展開することにした。

## (2) 様々な奏法と道具による音や音楽の表現

特別授業では、まず学生に打楽器奏者の演奏を聴いてもらった(図1)。その目的は、楽器の魅力を最大限に引き出すプロの演奏に触れ、学生の感性を高めることと、楽器1台でどれほど豊かな音や音楽を生み出すことができるのかを学生に知ってもらうことである



図1 林氏による演奏《小太鼓組曲》

曲は、S・フィンク(Siegfried Fink 1928-2006)の《小太鼓組曲Trommel suite》とE・ノボットニー(Eugene Novotny 1960-)の《ミニット・オブ・ニュースA minute of news》を選択した。その理由は、どちらもスネアドラム1台のみで演奏し、《小太鼓組曲》では、様々な奏法(多種類のロールやリム・ショットなど)によって、また、《ミニット・オブ・ニュース》では、様々な道具(スティック、マレット、ブラシ、手)によって、音楽の流れや音色、リズム感、音の違いを体験することができるためである。

林氏の演奏からは、奏法や道具の違いだけではなく、卓越した技術による音色の多彩さやリズムの鋭さ、音の幅広い強弱変化が感じられた。授業後に行った学生の自由記述アンケートには、「体でリズムを感じて楽しそうに演奏している姿がとても印象的だった。」「1つの楽器で様々な音が出ていて驚いた。たたき方や演奏の仕方によって様々な種類の音楽ができていてすごいと思った。」「打楽器は音に変化がないものだと思っていたが、音の出し方で様々な音が出ることを知り、とても面白かった。」という率直な感想の他、「プロの方の演奏はやっぱり素晴らしく本当に感動した。自分でも様々な音の表現を試みたくなった。」「鳥肌がたった。音は言葉がなくても物語をイメージすることができると思った。」という音表現や想像性にも言及した感想が多くみられた。

これらの記述から、学生は小太鼓1台でも様々な方法で、あらゆる表情に満ちた多くの音を出すことができると知り、「リズム楽器」としての捉え方だけでなく、打楽器で音を表現することの魅力を強く感じたといえるだろう。

## (3) 子どものうたと合わせた音表現

次に、林氏と研究者が、音表現を取り入れた8曲の子どものうたを演奏した。その目的は、学生がこれまで授業等で学び、よく知っている子どものうたに音表現が加わることで、それらを聴いたり歌ったりした時に、自分のもつイメージがどれほど変化するかを実際に体感してもらうことである。

演奏した曲目は、表3の通りである。林氏と研究者が子どものうたの歌詞から連想した音の表現を取り入れて、色々なモノ(日用品)と楽器、ピアノを用いて演奏した。それらは、《ピクニック》の動物の鳴き声や《虫の声》の生き物の鳴き声、《あめふりくまのこ》の雨や風の音、《うみ》の波の音など、自然を模倣した音や、《線路は続くよどこまでも》の汽笛の音、鐘の音のよう

に情景を描写した音など、実際に聞いたことのあるような馴染みのある音が挙げられる。これらは、学生だけでなく子どもにとっても身近な音であり、想像しやすい音であるといえよう。

音を出す方法は、オーシャンドラムや汽笛、カラス笛など、楽器類を本来の奏法通りに演奏するものもあるが、《ピクニック》では、持ち手を付けたスーパーボールで小太鼓の表面を滑らせて、牛の鳴き声を表現したり、《線路は続くよどこまでも》では、発泡スチロールにサンドペーパーを取り付けたものをこすり合わせて、車輪が回る音を表現したりするなど、楽器本来の奏法にとらわれず、日用品を積極的に用いて、音を表現した（図2）。



図2 《線路は続くよどこまでも》の音表現

表3 子どものうたに合わせた音表現

曲目	音の表現	使用した日用品と楽器
1 ピクニック	口笛を吹く音、風の音、スキップをする音、ひつじ、やぎ、牛、かえるの鳴き声	小太鼓、リード、ウッドブロック
2 おばけなんてないさ	からかさおばけの歩く音(下駄の音)、火の玉の音	木の板、サウンドホース、フレクサトーン、スライドホイッスル
3 虫の声	こおろぎ、すずむし、くつむしの鳴き声	大小の鈴、紐に通したスズ
4 線路は続くよどこまでも	汽笛の音、鐘の音、車輪が回る音	汽笛ぶえ、鐘、サウンドペーパー
5 あめふりくまのこ	雨の降る音、風が吹く音、水の流れる音、葉が風にそよぐ音	シンバル、チャフチャス、鉄琴、とうもろこしとざる
6 うみ	波の音、かもめの鳴き声、砂浜の音、	オーシャンドラム、リード、チャフチャス
7 ゆうやけこやけ	カラスの鳴き声、子どもがスキップをして帰る足音、夕焼けの空	スズ、カラス笛、声
8 小鳥のうた	ことりの鳴き声	水笛、パードホイッスル、鈴

また、《おばけなんてないさ》では、おばけの音をどのように想像して表現するのかを検討し、スライドホイッスルを上下に早く動かして音を出したり、木の板を打ち付けて、からかさおばけが歩く音を表したり、フレクサトーンを小刻みに動かして火の玉の音を表現したりと、様々な方法を用いた。

これらの表現方法は、身近な音をいかに身の回りのモノで表現したり、楽器ひとつからどれだけ多様な音を引き出ししたりすることができるのか、また、表現する際にどれだけ想像力を働かせて音を楽しむことができるかを提案し、学生に考えてもらう機会となった。

授業後の自由記述アンケートでは、「知らない楽器もたくさんあって、身近なモノも楽器になり、聞いていて楽しかった。」という多様な音表現の方法への発見や「イメージや想像する力がとても大切だと思った。」という音表現の取り組みへの気づきが多くみられた。また、「表現の仕方でもこんなにも音を出すことができることを知り、すごいなと思った。音には一つ一つ意味があることを学んだ。」という、音そのものへの発見もみられた。

#### (4) 音探しと音表現の実践

授業の後半では、学生が6、7人のグループに分かれて音表現を考える時間を設けて、1グループずつ発表した。その目的は、音表現に触れて学んだ技術を自ら実践し、保育現場で生かすことのできる能力を養うためである。学生は、楽器類の音を試しながら、様々な音の出し方を相談し、実践していた。その際に、研究者は身近な音の表現はもちろん、想像上の音を特に

重視するよう学生に助言した。例えば《おつかいありさん》では、ありがぶつかる音はどんな音なのか、《しゃぼんだま》では、しゃぼん玉がとぶ音や消える音はどんな音なのかを想像し、そのイメージを大切に音を表現するのである。その理由は、学生に子どものうたの歌詞を吟味し、その情景をイメージしたり、想像を働かせて曲の魅力を引き出したり、歌の背景にある目には見えない気持ちをも表現するためである。

学生の発表では、全グループが、30分程度の短い時間で試行錯誤を経た発表であったが、どのグループも打楽器をリズム楽器としてのみ使用することはなかった。例えば《おはながわらった》を選んだグループは、小さいお花から大きなお花へと花が開いたり笑ったりする音を表現しようと試み、カスタネット、鈴、タンバリン、小太鼓と順に大きな音を入れており、打楽器をリズム楽器としてだけでなく、音表現として奏した。また、《アイアイ》を選んだグループは、鳥の鳴き声をさせて南の島にあるジャングルの情景を表現してからピアノ伴奏をはじめ、さるが木にのぼる音や飛び跳ねる音を、ギロやフレクサトーンで表現した。

授業後のアンケートでは、「音を表現することに興味を持てたか」の質問に82名全員が「はい」と回答し、自由記述には、音表現に対する感想や発見が多く書かれた。それらは、例えば「音を出すことが楽しくなって、ずっと鳴らしていたくなる気持ちでした。」「演奏にはどうしても完璧さを求めてしまうけれど、なんでも自由にその音を楽しめたらいいのだと思った。音を組み合わせることで色々なことを表現できることを学んだ。」という純粋な楽しさを感じられたもの、また、「自分たちで考えて表現したり、自分のイメージに合う楽器を探したりすることが楽しかった。」「イメージを持って聴くことで表現された音の意味を感じることができて面白かった。また自分が想像した音と他者が想像した音に違いがあり、それも面白かった。」「自分が想像している音と近い音に出会えるとすごく嬉しいし周り分かってくれるとさらに嬉しい。」というグループでの取り組みに対する感想がみられた。

これらのことから、学生が、音を表現することを通して、自分の経験を思い出し、心と向き合い、自分なりの表現を模索したこと、また、グループで話し合っ発表をすることで、他者と共感したり、新しい発見をしたり、気持ちを伝え合ったりすることができた取り組みであったといえる。

### (5) 学生の意識変化：アンケート結果から

最後に、学生の意識変化を把握するために授業後アンケートを行った。その結果を授業前アンケートと比較したものが、表4の通りである。授業前に比べ、「演奏しやすい」と答えた学生が20名増え、また、「指導しやすい」と答えた学生が32名増え、どちらも8割以上の学生数となった。その理由は、学生の打楽器に対する知識が深まり、学生が、正しくきちんと演奏しなくてはいけないというような固定観念から解放されて、音を表現するという本来の活動の意味を捉えることができたからではないだろうか。

特に、授業前アンケートで打楽器を「特別なもの」と感じていた学生は、「すぐにできるものでは

表4 授業前アンケートと授業後のアンケートの比較

	選択肢	授業前アンケート	授業後アンケート
1	楽しい	76(92.7)	81(98.8)
	つまらない	6(7.3)	1(1.2)
2	演奏しやすい	56(68.3)	76(92.7)
	演奏しにくい	26(31.7)	6(7.3)
3	身近なもの	43(52.4)	68(82.9)
	特別なもの	39(47.6)	14(17.1)
4	指導しやすい	36(43.9)	68(82.9)
	指導しにくい	46(56.1)	14(17.1)

単位:人(%)

ないから」「持っていないから」「あまりさわったことがないから」と理由を述べていたが、授業後アンケートでは、「身近なもの」という回答が8割以上を占めた。学生が音遊びの経験を通して、生活のなかで取り入れる方法を知り、保育現場でも実践できる可能性を強く感じたといえるだろう。

#### 4. 「音遊び」の効果と可能性

これまで述べてきた「音遊び」の方法は、児童期の「音楽」へどのように発展させることができるのであろうか。例えば、動物の鳴き声や自然の音を表現することをテーマに音遊びを楽しみ、そこから楽器の素材（木、金属、皮など）の違いや音の高低、強弱の違いに気づいて、「音づくり」から「音楽づくり」へと発展させることができるだろう。クラスの中でどんな音がきこえるのか耳を澄ませ、それらを音で模倣したり、言葉で発表しあったりすることで、より豊かな「音楽づくり」へと結びつけることができるといえる。

特に、楽器の正しい使い方を知ること大切であるが、楽器の材質や形と向き合い、鳴らし方や響きを吟味する活動は、より豊かな音の表情を知ることにつながる。子ども自身が様々な方法を試し、音の楽しさを知ることが、音楽づくりへの第一歩となるだろう。そして、それらが自分の感受性をもとに「明るい音」「暗い音」だけでなく、「さみしい音」「悲しい音」「うれしい音」「切ない音」など、気持ちを表現する音へ結びつけることができれば、音楽的な要素と自分の表現との相互性が生まれ、より表現が深まることが期待できる。また、授業実践で《うみ》や《虫のこえ》は第1学年、第2学年の共通教材に含まれている。これらについても、「音遊び」を通じて音の表現を加えれば、子どもの想像力をより高めて、歌う活動へも生かされるだろう。

#### 5. まとめ

本論を通して、幼児教育と小学校教育での「音」に関する援助や指導法を探り、「音表現」の授業実践分析結果から、保幼小連携における「音遊び」の効果と可能性について考察した。乳幼児期に「音」へ耳を傾けることを意識することの大切さは言うまでもなく、子どもの気づきから始まる「音遊び」を、保育者や友だちとともに経験することができれば、より豊かな音表現が生み出されるだろう。そして、その表現遊びは、その後の子どもと音楽との関わりの様々な場面で生かされることが期待できるだろう。

今後は、本研究をもとに、教育現場で子どもを対象とした実践を行い、それぞれに適した、より具体的な指導方法の開発を目指したい。研究者は、これまでも幼児を対象とした音楽会や幼稚園、保育園への訪問コンサートで音表現を試みてきたが<sup>5)</sup>、実際にそれらを「音遊び」として、教育現場でどのように生かすことができるのかを探っていくことができれば、より具体的な指導法の開発につながるだろう。その際には、幼児と児童の特性に配慮し、一人一人の表現に目を向け、友だちと音を共有する楽しさ、表現の違いを知る面白さを生かすべきである。

今回の授業実践で学生の意識を変化させることができたように、現場の指導者が行いやすい指導法の開発が必要であると考えられる。今後も継続して、保幼小の円滑な接続に相応しい「音遊

び」の方法を探っていきたい。

## 脚 注

- 1) 『10の姿』は、以下の通りである。「1. 健康な心と体」「2. 自立心」「3. 協同性」「4. 道徳性・規範意識の芽生え」「5. 社会生活との関わり」「6. 思考力の芽生え」「7. 自然との関わり・生命尊重」「8. 数量・図形、文字等への関心・感覚」「9. 言葉による伝え合い」「10. 豊かな感性と表現」
- 2) 岡林他：2017
- 3) 『幼稚園教育要領』だけでなく、『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』にも、同様に提示されている。
- 4) 林美春氏 (打楽器奏者) “フルリン打”、“Teatro Musicale”メンバー
- 5) 白石：2016、同：2017

## 主要参考文献

- 岡林典子、難波正明他 2017「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(4)―絵本を用いた『表現遊び』から『音楽づくり』へ―」『京都女子大学発達教育学部紀要』第13号：73-83。
- 小川容子・今川恭子 2008『音楽する子どもをつかまえたい―実験研究者とフィールドワーカーの対話』岡山：ふくろう書店。
- 河合優子 2017「新しい学習指導要領①論説1 幼稚園教育要領改訂のポイント」『初等教育資料』5月号、No.953：2-13。
- 佐野仁美、岡林典子、坂井康子 2016「音楽づくり」へつなげる幼児の表現遊び：絵本を用いた実践をもとに」『関西楽理研究』第33号：15-31。
- 白石朝子 2016「乳幼児向け演奏会のプログラムに対する一考察―『おやこ音楽会』の開催をもとに」『名古屋女子大学紀要』第62号：283-293。
- ―――. 2017「領域『表現』における幼児の音楽表現を豊かにする指導法の検討―研究コンサート(全3回)の実践から―」『名古屋女子大学紀要』第63号：322-333。
- 津田正之 2017「新しい学習指導要領②論説8 学習指導要領改訂のポイント 音楽科」『初等教育資料』6月号、No.954：26-37。
- 東洋館出版社編集部 2017『平成29年版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理』東洋館出版社。
- 無藤隆(監修)吉永早苗(著) 2016『子どもの音感受の世界―心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求』萌文書林。